本年４月に本学と全学協定を締結した東呉大学は、日本語教育に定評のある台湾の私立大学です。その日本語学科を設立時から支えたのは、筑波大学の前身である東京教育大学で学んだ蔡（さい） 茂豊（もほう）名誉教授でした。
協定締結にあたり、本学永田学長と蔡（さい）先生との対談が実現しました。

# 蔡茂豊（さいもほう）

東呉大学名誉教授

| | |
|---|---|
| 1933 年 | 台湾屏東県東港鎮に生まれる |
| 1953 年 | 屏東師範学校を卒業し国民学校教師に |
| 1957 年 | 国立成功大学（漢文学専攻）入学 |
| 1962 年 | 日本政府国費留学生として<br>東京教育大学文学研究科国語国文学専攻研究生 |
| 1973 年 | 東呉大学日本語学科主任 |
| 1976 年 | 『東呉日本語教育』創刊<br>刊行の辞に語族別日本語教育を唱える |
| 1980 年 | 東呉大学日本文化研究所修士課程設置<br>教授兼初代所長（～ 1988 年）<br>筑波大学学術博士 |
| 1993 年 | 台湾日本語教育学会創立<br>初代会長（～ 1995 年） |
| 2001 年 | 東呉大学人文社会講座教授 |
| 2003 年 | 『台湾日本語教育の史的研究』（上・下）刊行 |
| 2005 年 | 台湾における日本語教育普及への貢献により<br>対日断交後初の旭日中綬章受章 |
| 2012 年 | 東呉大学と台湾日本語教育学会から引退 |

この間、日本語教育に関する論文 92 本、教材 47 冊（編著）、著書・訳書 28 冊を発表するとともに、43 名の修士論文と 15 名の博士論文を指導。

## 偶然と運命と縁と

永田：本日は、お越しいただきありがとうございます。内心、協定の調印式よりも蔡先生にお会いすることをとても楽しみにしていたんです。こうしてお話しすることができて光栄です。

蔡：私は 1965 年に、留学していた東京教育大学の博士課程を休学し、日本語教育をするために台湾へ戻りました。台湾の日本語教育は始まったばかりで、まだ手探り状態でしたし、政治的には日台関係は険悪でしたから、日本語に関わる者にとっては困難な時代でした。そんな中で、北原先生（元筑波大学学長）には、夏休みの集中講義に来ていただいたり、台湾への派遣講師を何人も紹介していただいたりと、ずいぶん助けていただきました。今日、東呉大学の日本語学科が高い評価を得られているのは、このおかげだと思っています。

永田：先生が国費留学生として日本に来られたのは 1962 年でしたね。留学先に東京教育大学を選ばれたのはなぜですか。

蔡：本当は東京大学を希望していたんです。しかし、私が指導をお願いしようと思っていた日中比較文学の先生が退官されてしまっていて、代わりに東京教育大学を紹介されました。教育大では初めて国

費留学生を受け入れるということで、教員も職員もてんやわんやだったようです。自分で選んだわけではありませんでしたが、教育大で台湾にゆかりのある馬淵先生と出会い、国語学と国文学の研究をすることになったのです。今思うと、それが運命の分かれ道でしたね。

永田：偶然が実は必然だったのですね。教育大で修士号を取って、博士課程に進まれたのですか。

蔡：博士課程に進んだ直後に、台湾の大学で戦後初めて日本語学科ができることになって、帰ってこないかと声をかけられました。馬淵先生に相談したところ、これからは日本語教育の時代だから君に相応しいと、快く送り出してくれました。日本で研究を続けても学位を取れる保証がないということだったのかもしれません。でも、それで私は日本語教育の道へ踏み出すことができたのです。

永田：後に、筑波大学で博士号を取られましたね。休学していた博士課程に戻られたのですか。

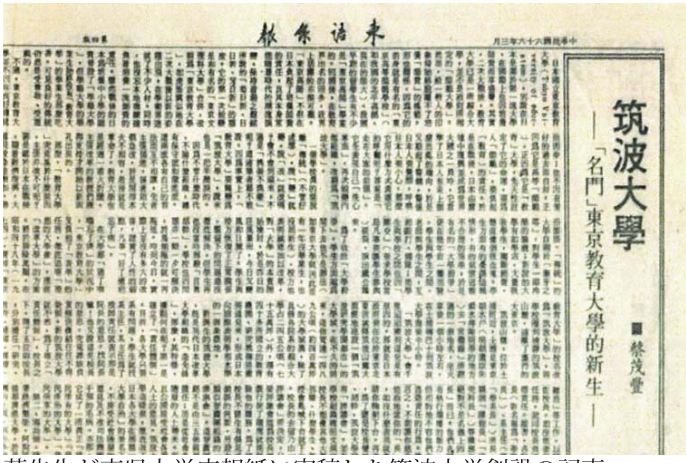
蔡：当時、私は東呉大学の日本語学科主任になっていましたが、博士号を持っていないことに引け目を感じていました。他の学科の主任は皆、アメリカ帰りで学位を持っていましたからね。それで、東京教育大学に復学しようと思いました。再び馬淵先生に相談したら、開学したばかりの筑波大学に客員教員として来てはどうか、と言っていただきました。論文博士という方法もあるというわけです。

永田：台湾での先生のご活躍が日本にも伝わっていたのですね。

蔡：認めていただいていたことにとても感激しました。ただ、1977年に学位請求論文を提出したのですが、筑波大学は開学間もなくて、課程博士の実績がなかったために、論文博士を出せないことがわかりました。学位がいただけたのは1980年のことです。台湾では、日本語教育の分野で初めて博士号を取得したということで、新聞にも載ったんですよ。学位を得たことで、学内での発言権も大きくなり、仕事の幅が一挙に広がりました。

永田：お弟子さんたちも大勢、筑波大学へ送られています。

蔡：日本政府の奨学生として、


東呉大學報

筑波大學

—「名門」東京教育大學的新生—

■蔡茂豐

蔡先生が東呉大学広報紙に寄稿した筑波大学創設の記事
（1977年3月）

たくさんの学生を筑波大学に受け入れてもらいました。その年の奨学生の定員すべてが、東呉大学の日本語学科の学生だったこともあったほどです。彼らは帰国後、台湾全土で日本語教師として活躍しています。

永田：先生が最初に築いた筑波大学とのつながりを、お弟子さんたちがさらに強くしていった。筑波大学にとっては、これも先生の教育の大きな功績の一つです。

## 学びへの強い思い

永田：台湾の言語は、現在では北京語ですが、先生の世代は日本に統治された時期があり、初等教育は日本語で受けられています。その後、中国による統治に変わって、日本語の使用も禁じられた。そのような背景にありながら、日本語を学び続けた動機はどのようなことだったのでしょうか。

蔡：私は小学校５年生まで日本語で教育を受け、日本語の本も読んでいましたし、家できょうだいと交わす言葉も日本語でした。特に５年生の時に担任の先生が日本人になって、その先生とは宿舎で一緒に生活しました。それで、勉強だけでなく生活面でもいろいろなことを教わりました。まだ少年でしたから、植民地だとか政治のことを考えることもなく、純粋にその先生を慕っていました。今になってみると、自分でも気づかないうちにその記憶がずっとどこかに残っていたのでしょうね。日本に留学することになった時、その先生を訪ねようとしたのですが、戦後、帰国されて間もなく亡くなられたとのことでした。

永田：教師という職業に就かれたのも、その先生の影響ですか。

蔡：いえ、教師になりたいとは思っていませんでした。私の家は経済的に苦しかったので、勉強を続けるためには師範学校に進むしかなかったんです。師範学校では食事はもちろん、給料までもらえましたから。そもそも、日本の統治が続いていたら、今日の私はなかったかもしれません。というのは、中国の国民党政府は、台湾の各市町村に中学校を設けてくれたのです。それまでは台湾人にとって中学校さえもなかなか入れるものではありませんでした。私は中学校では中国語を習い、中国の教育を受け、そして師範学校に入ったのです。師範学校を卒業してから３年間は、義務で教師をしました。

永田：ということは、中学から師範学校までは中国語で学び、教師になってからも中国語で教えられていたわけですね。しかし、そのまま教師を続けられるのではなく、国立

成功大学に入学されました。やはり、もっと勉強したいという気持ちが強かったのでしょうか。

蔡：そうです。チャンスがあれば普通の大学に進学したいと考えていました。師範学校の卒業生の多くは、師範学院（師範大学）に進学して中等教育の先生になります。けれども私は、一般大学を目指していました。小学校の教師をしながら、友人たちが普通高校から大学に進学していくのを横目で見て、このままここにとどまってはいけない、と自分を鼓舞したものです。

永田：大学で学ぶために、ずいぶん苦労されたのではないでしょうか。

蔡：師範学校では、一般の大学受験に必要な科目、例えば英語などは教えてくれませんでしたから、受験勉強は大変でした。当時の成功大学は工学や医学では難関校で、私が目指していた漢文学はそれほどでもなかったとはいえ、我ながら頑張ったと思います。

## 漢文学から日本語教育へ

永田：漢文学を専攻されていたということですが、日本語教育とはまだまだ距離がありますね。大学で日本語を学ぶことはなかったのですか。

蔡：大学を受験する時、自分で学費と生活費を稼ぐという条件で父親を説得したんです。ですからそのために、成功大学に入ってから、日本語を教え始めました。その頃ようやく、戦後禁じられていた日本語教育が解禁されて、英文学科の選択科目として日本語を履修することができるようになったのですが、同期生は私よりも一回り若く、日本語で教育を受けた世代ではありませんでしたし、他に日本語がきちんとできる先生もいませんでした。それで皆、私を頼ってきたんです。師範学校出身の私は、教えることも得意です。まさに好都合でした。3～4年生の頃には学内でかなり有名になっていたんですよ。

永田：なるほど。日本語を学ぶのではなく、教えるところから始まったのですね。それにしても、当時の台湾ではまだ日本に対する印象は良くなかったのではないでしょうか。日本語教育が解禁されたとはいっても、学生が敢えて日本語を学ぼうという気持ち

にはならないように思うのですが。

蔡：そのことは今でも議論されています。台湾人はなぜこれほどまでに日本人に対して弱腰なのか、と。おそらく、戦後、台湾へ乗り込んできた中国国民党のやり方が、それ以前の日本の植民地時代よりもよほど厳しかったことに、その原因があるのではないかと私は考察しています。日本の植民地であった時代、台湾の人々は日本人から過酷な扱いを受けました。それが50年も続いたのですから、日本人を恨んでいる人もたくさんいるはずです。朝鮮人も同じような経験をしていて、今でも日本人への怨念を露わにする人がいます。それなのに、台湾人は日本人に対して直接その怒りをぶつけるようなことはしないのです。それは、日本よりも中国による統治の方がはるかに厳しい政治的統制であったためです。私がこのような分析をすることができたのは、台湾人の李登輝さんが大統領になってからのことです。様々な日本語の資料が公開されてはじめて、研究が進展しました。

永田：李登輝さんが資料を解禁するまでは、そういったこともわからなかったわけですね。

蔡：日本語教育を受けていない世代の人たちは、日本に対する憎しみがあったとしても、その感情を切り離して、日本語を使うことを選んだのです。

## 独自の方法論を生み出す

永田：ところで、自分が日本語を流暢に使えるということと、それを人に教えるというのは別の話だと思います。日本から帰国されて本格的に日本語教育に携わるようになって、どんなことを感じられましたか。

蔡：国語としての日本語と、外国語としての日本語は違うということです。東京教育大学でも、国語学や国文学、国語教育という研究分野はありましたが、日本語教育というのはありませんでした。でも実際にやってみると、同じ日本語の文法でも、国語教育と日本語教育とでは説明の仕方が異なるんです。私は国語学で学んだ日本語の知識を生かそうとしましたが、それは日

蔡先生着任当時の東呉大学日本語学科（1973年）

本人向けの国語文法でした。日本語教育のための文法書というのは、私も作ろうとしてなかなか進まずにいますが、他でも未だに作られていないのではないでしょうか。

永田：先生ご自身も、日本語教育が専門だったわけではなく、模索しながら日本語の教え方を構築されていったということですか。

蔡：当時は日本語が話せるというだけで日本語教師になることができました。日本に留学した人にとっては、それがいちばん手っ取り早い就職先だったとも言えます。専門分野に関わらず、日本の大学で学位をとっていれば良かったんです。そのことも、台湾で日本語をどうやって教えるかという方法論の確立が遅れてしまった要因だと思います。

永田：日本語教育の方法論を新たな学問として成立させていく中で、先生は、「語族別日本語教育」という新しい教育法を提唱されていますね。それはどのようなものですか。

蔡：台湾は多言語社会です。台湾人、客家人（独自の伝統や方言を有する漢民族）、大陸系、先住民族などがいて、彼らはそれぞれの言語を持っています。英語やフランス語を話す人もいます。このようにいろいろな母語を持つ人々に日本語を教えるにはどうしたらよいか。語族別日本語教育は、地域や民族など、共通の言語を持つ人々のグループを作り、そのグループの共通語を媒介語として日本語を習得していくという方法です。そのためには、教える側も相手の共通言語に精通している必要があります。日本語を学

台湾における日本語教育普及への貢献により旭日中綬章を受賞（2005 年）

ぶのだから日本語で教えるべきだという考え方が一般的かもしれませんが、苦手な言語で外国語を習うのは効率的ではありません。私は、日本やシンガポールなど海外の大学へ教員を派遣し、この方法を試してみて、その効果を確かめました。現在、台湾ではこの理論に基づいた日本語教育が主流となっています。

永田：台湾ならではの社会構成や風土のもとで、日本語教育も独特の発展を遂げたのですね。先生の理論をお弟子さんたちが実践し、成果を上げて、台湾の各地へ展開していったというのも素晴らしいことです。

## これからの教育に向けて

永田：先生はすでに教育現場の第一線からは退かれていますが、長年、台湾での日本語教育を主導してこられた先生の眼には、現在の日本語教育や日本語研究はどのように映っているのでしょう。

蔡：時代はずいぶんと変わりました。近年、日本語の教育や研究を専門とする人たちの間では、日常会話は日本語でも、学術の議論は英語で行われることも珍しくありません。日本語教育やその研究が世界中で学問分野として認められてきたことの表れでもありますが、ひとつの外国語ができるというだけでは不十分な時代になったと感じています。英語ができた上で、さらに自分の専門性を高める、これからは、それが学術の世界で活躍できる条件だと思います。台湾で物理学を専攻する人は、日本語がわからなくても物理学は学べますが、日本語ができれば強みが格段に増すはずです。私も英語ができたら、もっと幅広く教育や研究ができたかもしれませんね。

永田：語学は、研究や仕事の可能性を広げるために欠かせない力になるということですね。

蔡：教師と学生との関係も大きく変わったように感じています。私は、自分の子ども時代や学生だった頃の先生にとても恵まれました。知識を教えてくれるだけでなく、熱心に励ましてくれたり、親身に相談にのってくれたりと、先生の存在は精神面でも大きな支えでした。ですから自分も教える立場になってからは、同じように情熱を持って学生と触れ合うように心がけました。しかし最近では、そのような姿勢で教育に臨む教師は少なくなったのではないでしょうか。

永田：確かに、研究者として一流の人は多いけれど、「先生」として全人的に導いてくれるような人は減ってしまったかもしれません。日本でも

かつては、先生というのはそんなふうに真摯に生徒や学生と向き合い、気にかけてくれる、親のような役目も担っていたように思います。

蔡：中国語に「五経の教師になれ」という言葉があります。五経、つまり学問を教えなさい、そして人の道の理も教えなさい。人間としてどうあるべきかということまでを含めての教育、ということです。学問や研究の指導はしても、人格形成や将来の生き方にまでは関わらないという態度は、私は違うと思います。私は学業の面では学生に厳しくあたりましたから、怖がられていたかもしれません。でも、他の部分では、悩みを聞いたり食事を共にするなど、学生を自分の家族だと思って支援しました。本来の教師の役割を越えているかもしれませんが、人に何かを教えるという仕事は、それだけ大きな務めも負っていると思います。

永田：教える者の一人として、とても考えさせられるご指摘です。私も先生のように熱い気持ちで学生に接していきたいと思います。まだまだ伺いたいことがたくさんありますが、残念ながら時間になってしまいました。また改めて、ゆっくりとお話しできる機会をいただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

東呉大学と筑波大学との全学協定締結記念写真（2016 年）
前列左より蔡先生、東呉大学潘大学長、永田学長、ベントン筑波大学副学長

旭日中綬章授与式記念写真（2005 年）

蔡先生が初代所長を務めた
東呉大学日本文化研究所

# 門下生からの一言

静宜大学 日本語文学系 准教授
（筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科単位取得退学）

1975 年 9 月、東呉大学日本語文学科入学式の時に先輩からは、蔡先生の授業で朗読を指名された場合、発音の間違いは論外、吃ってスピードが足りなかったり、アクセント一つ間違ったりしたら、ひどく叱られるぞ、というアドバイス。果たしてそうだった。

朗読の練習を繰り返すクラスの風景、宿舎の夜半、隣りのベッドから出たテキスト朗読のうわ言、マッチ棒と楊枝で朗読練習の回数を数えるクラスメートのことをよく覚えている。また、朗読後いつも思わず冷汗三斗の背中を触った。それは、いつしか自分の習慣となった。先生の厳しい訓練のお陰で、多少自信のある日本語力を身につけたが、先生の前で堂々と日本語を話すことが出来たのはずっと後のことだった。

弟子になったことの幸せを今なお感じさせてくれる先生である。

国立政治大学 日本語文学系 教授
（筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科修了）

東呉大学日文系第一期生の我々は、一年次のとき、日台国交断絶に直面したが、蔡先生は我々に勉強に励むよう諭し、厳しく指導してくださった。先生は我々がきれいな標準語を話せるよう、会話の尾久幸子先生、音声学の原土洋先生を迎えた。そしてご自身で文法を教え、我々が文の分析を繰り返し練習できるよう授業を行った。おかげでしっかりした日本語力を習得でき、みな感謝している。

先生は東京教育大学出身のため、我々第一期生六人はその推薦で筑波大学に留学した。現在、そのうちの四人が大学で教鞭を取っている。

厳しい反面、面倒見がよく、数多くの学生を指導してきた蔡先生は、今では台湾の日本語教育を見守ってくださる、優しい親のような存在である。